



最期の日々、自宅のように



愛知国際病院ホスピス

広い田園地帯を抱える愛知県日進市は、一方で、名古屋市や同県豊田市のベッドタウンとして人口が毎年約1千人ずつ増えつつある。ここに、限られた人生の残り時間を心穏やかに過ごすこととする患者に寄り添う終末期ケアを施す病院がある。

病室の窓からは、鮮やかな新緑や季節ごとの美しい花が見え、明るい日が差し込む。
愛知国際病院ホスピスは1999年4月、同市米野木町の同病院の敷地内に、県内で初のホスピスとして建てられた。
市内に住む河野文恵さん(92)は、2002年9月に母親を、11月に父親を、ここで相次いで見送った。

ボランティアも活躍

母親はホスピスに入院する前からすでに意識はなく、誰が話しかけても反応しなかった。しかし、かわいがっていた飼いの猫をホスピスに連れて行き、枕もとに近づけると、その鳴き声にまな目が動いた。
「自宅にいると思ったのか、あの時の反応には家族みんなが驚きました」
1週間ほどして、母は71歳で逝った。

ホスピスでは、医師や看護師だけでなく、ボランティアも重要な役割を果たしている。主婦ら48人が登録し、曜日ごとに4～5人で訪れる。庭で咲いた草花を病棟に飾り、掃除もする。ティータイムでは、お茶だけでなく、飲むことが難しくなった患者のためのアイスクリューやかき氷を提供する。押し花や絵手紙の教室もある。

「自宅にいると思ったのか、大腸がんが肺に転移していった父親の病状が悪化した。自分のことは自分でできていた父親は、母の仏壇に参ってからホスピスに向かった。」
毎日、病室に通った河野さんは、午後のティータイムにボランティアによるおもてなされるコーヒーや紅茶を、父親と楽しんだ時間が忘れられない。
「父の表情も、優しい、本心で種やかな時間でした」

面会時間に制限はなく、病室から通動した家族もいた。喫煙や飲酒も可能で、愛犬や愛猫が病室に入ることもできる。
成田昌代看護師長は「患者さんやご家族が、残された可能性に向けて一生懸命生きようとする強さに学ばされる。一緒に笑ったり、泣いたりする瞬間を大切にしています」と話す。

数日ですぐになる人もいます。太田信吉院長は「最期の時を預けられた医師と、患者の信頼関係が大事。目線を同じにして、画像ではなく対面で病状を説明し、身体に直接触れる。患者さんの人格、存在意義を尊重した診療を心がけています。」

「お母さん、コスモス好きだったよね」「本当にきれいね」。何年にもわたる会話や交わすなかで、それまで以上に気持ちを通わせていたのを感じました。それぞれが穏やかにいられる環境がそうさせたのだと思えます。



- ①ホスピスで患者やその家族を支えるボランティア。この人たちの笑顔や言葉に癒やされる人も多い
- ②病室の窓を開けると明るい日差しが入る。どの部屋からも庭が見えるように設計されている。いずれも愛知県日進市米野木町南山



担当します

1991年入社、48歳。岐阜総局なをを経て昨年5月まで日進市も担当する瀬戸支局長、名古屋出身、小5の双子の男子の母親。改めて日進市内を走り、住みやすい街だと再認識した。現名古屋報道センター員。

川村真貴子

今回の舞台、愛知県日進市は都市と農村の両面を併せ持つ「古くて新しい街」。市内には大学や短大がいくつもあり、若い住民たちも増えています。大きく変容しつつある地域の魅力に迫ります。

